

---

# 第一四三話

## 千手丸殿誕生事

『前太平記』下 卷第二十三 五六頁から六十頁より

---

### 【頼信の恋煩い】

長徳年間は四年で終わり、翌年から長保元年となる。源家の人々は、去年は（満仲薨逝のため）喪に服す期間であったので、全てが顔をしかめて泣き出しそうになった（日々だった）のに引き換えて、素晴らしい春をお迎えになる。前任の肥前国守頼光は、春宮大進 (老) となられ、長男下野判官頼国は、東宮学士 (弐) となられ、前任の周防国守頼親は、信濃守に任命される。その他一族の者は、四位・五位の諸大夫まで、それぞれ官位が昇進して、非常に栄えなさる中で、冷泉院判官代頼信朝臣は、去年の春から辛そうにしていらっしゃって、公私ともにお仕事も捗られておらず、引きこもってばかりでいらっしゃる。ご兄弟は多くいらっしゃった中でも、頼光朝臣は特にご兄弟仲がよく、父と子のように思い込みなされたので、とても辛くお思いになり、色々と訪ねて宥めなされた。今年二十六歳になられるが、まだ決まった妻という人もいらっしゃらなかったもので、公家・武家問わず、多くの家の人々が我先にと（源家との）縁を求め、（頼信を）婿と致そうということを望んだが、頼信は全く聞き入れなさらず、世の中をつまらなくお過ごしになる。ご一族の

人々、並びに代々の従者らは、皆心苦しく思うが、加えてこのような終わりが無い  
お悩みようを拝見き、どのようなご病気であろうかと、気がかりに思ったが、近頃  
になって、その詳細は知れたのだった。

[頼信、修理命婦に恋文を贈る]

修理命婦と申し上げた官女は、品位も容姿も魅力が備わり、心までも優美で、言

文質愛敬づき、心操さへ艶しくて、

葉使いの様子までも聞く人の心を動かした。ところで、頼信朝臣はどのような玉簾

物打ち云ひたる気配まで聞く人魂を動かせり。然るに頼信朝臣、何なる玉簾の

(参)の隙間から覗き見でその姿をご覧になったのだろうか、そわそわと思ひこがれ

垣間見にか其姿を見給ひけん、そゞろに浮石給ひけれ共、

なさったが、誰に頼み込むことができる伝もなく、無益に年月をお過ごしになる

誰して云び寄るべき伝もなく、空しく年月を過ぐし給ふに、

が、「男女の縁こそ難しいものだろう。せめて恋慕することだけでも（命婦に）知

「契りこそ難からめ、恋ふるとだにも知られなば、

られたならば、気晴らしをすることだけでもできるだろうか。伝のある人がいれば

せめては慰む事もや。

伝人もがな」と、

なあ」と、気持ちを一つに決意し探されたが、「私こそ」と言い出す人もいなかった

心一つに思ひ籠めて求め給ひけれ共、

たが、ある者が申し上げたのは、「その命婦の乳母は、去年の秋に夫に先立たれ、

「彼命婦の乳母、

去歳の秋夫に後れ、

尼になって、東山 (肆) にいますようだが、一人の娘を持っている。その娘は近頃兄

尼に成りて、

東山に候なるが、

一人の娘を持ちたり。

此娘、頃御舎兄

上頼光朝臣の奥方様へお仕え申し上げています」と申し上げたのをお聴き出しにな

頼光朝臣の、北の方に仕へ進らせ候」

と申せしを聞き出だし給ひて、

って、「これこそ相応しい仲人だろう。機会もあった」と嬉しくて、その夜が明け

「是こそ然るべき媒ならめ。

期も有りけり」

るのを待ち受けて、頼光朝臣の方へいらっしゃって、こっそり彼女をお呼び寄せに

なり、「こういう事情である。長年の思いの少しを伝えてあげてくれないか」とお

頼み申し上げられたが、彼女は首を傾げて、少し思い悩んでいる様子であったの

を、一途に繰り返して話し、(頼信が)書いて置かれていた手紙を取り出して、

「これを差し上げてくれないか」と言って、彼女の懐にそっと差し入れなさるとこ

ろに、人の気配がしたところ、(頼光の妻が)「あら恥ずかしい」とお立ちにな

り、簀 (伍) から出てお隠れになる。頼光朝臣の妻が物を隔ててこの話をお聞きになり、彼女をお呼びになり、「判官殿のご恋慕申し上げなされたところ、どうしてご

「判官殿の懸想じ聞こえ給ひしに、など

返答も申し上げなかったのか。それほどに恥ずかしがることであろうか」と、微笑

御応えも申さざりしぞ。さほどに耻ぢがはしき事にかは

み仰ったところ、女は顔を少し染めて、ありのままに言うことができず、ただいいえとだけ申し上げて座っていた。妻は「さあねえ。殿のお気に入りになったことこ

「いさとよ。殿の御気色に人りたらんこそ、

そ、貴方の幸福であろう。お呼ばれになったならば参上しなさい。差し障りあるま

御事が幸いならめ。召されなば参るべし。苦しからじ

い」と仰ったところ、女は今となっては弁明することもできなくて、「これこれのことでございます」とありのままに申し上げたところ、妻はお聞きになり、「今ま

「今まで

で公家や武家の人々と意中をほのめかし申し上げなされるのを、酷いように承知しな

公家武家の人々、取りどりけしきばなにみ聞こえ給ふを、無下に受け引き給はぬを、

さらないのを、どんなお心であろうかと思ったが、それではそのようなことであつ

何なる御心にやと思ひしに、

さてはさる事にて有りしぞや。

たのか。何か苦しいことがあるだろうか。伝えて差し上げなさい。若いお心に、さ

何か苦しかるべき。

伝して進らせよ。

若き御心に、

ぞかし苦しく思ったことだろう」と言って、すぐに彼女を命婦の元へおやりになら

さこそ切なく覚しけめ」

れた。

#### 【頼信の思い弥増す】

女はその場所に伺って、（命婦と）向かい合ったが、急に言い出すことはできず、

女彼処に詣で来て、

打ち向かひたれど、

疾にも得言はで、

まずは色々なことなどを話し出して、次第に灯台<sup>(陸)</sup>を持ってくるくらいの時間にそ

先づ四方山の事共語り出で、

漸燈台持て参る程にぞほのめかし聞こえける。

れとなく申し上げた。その（頼信が書いた）お手紙を取り出して差し上げたが、命婦

彼御消息取り出で、奉りけれ共、

命婦

さちらりと見ただけで、開いて読みもしない。取り持ちの女房は色々とぐちぐちと言

打ち見たる計りにて

開いても読まず。

媒の女房様々に誣ちければ、

ったところ、命婦は仕方なく、硯をお取り寄せになって、一筆書いて（折りたたんで）

命婦力なく、

硯召し寄せ、

一筆書ひて引き結び、

結び、「岩や木をその場に留めないほどのお気持ちに、どうして良くないように思い

「岩木を結ばぬ心には、

争でか疎かにも思ひ進らせなんや。

申し上げることができるだろうか。しかし、主上のご寵愛も気掛かりで、人がする噂

されども

内の御覚えも影護く、

人の口も

もたちが悪いので、今後はお手紙があるとしても拝見することもできない」と、言い

善悪なければ、

此後は御文有りとても、

見進らす事も有るまじき」

含めて（女を）返した。頼信朝臣は、しばらくの間も忘れられる暇もなくて、たやす

須臾の程も忘らるゝ隙も無くて、

く明ける春の夜も、一人で寝ると、天の雲の中に迷う雁の言付けを、待つ夜の間のう

明け易き春の夜も、

独りし寝れば、

久堅の雲井に迷ふ雁の伝、

待つ宵の間のうたゝ寐は、

たた寝は、夢も形にならない心の闇、むなしい夜も更けていき、消えて残った灯がほ

夢も結ばぬ心の闇、

文なき夜半も更け行き、

残んの炬幽かにて、

のかで、心細いちょうどその時、取り持ちの女房がお返事を懐に入れて参上した。頼

心細き折しもあれ、

信朝臣は、その人に出会うような気持ちで、とても心が惹かれ、お枕の近くまで（女

房を）お呼び寄せ、「どうだ、お返事は」と申し上げなされると、「内裏ではどんなこ

「中には何事をか

とをなさったのだろうか、ひっそりと隠れなさるので知りません。お言葉としてこの

遊ばしけん、

隠るへ給へば知り侍らず。

御辞しては

ようにおっしゃられた」と、詳細に話した。頼信朝臣はお返事をご覧になると、より

斯くこそ仰せられし」

どころとしたことも無くなって意識がはっきりなさらない。よりいっそう思いこが

れ、よそよそしいお返事であるが、その（手紙に）移った香りだけでもとあって、少

しの間も肌身離さず、依然として懲りぬままに、女房に命じて度々お手紙を送ったが、思うままにならない世の中を恨み、お返事までも聞こえてこずに、やはり意志は硬いようである。頼信朝臣はいつそう心が乱れて、今は人目を憚ることもできず、堰き止められない袖の柵(漆)に、失恋の噂が流れ、涙の深さに身が溺れそうになるが、どうしてむなしく(涙が)止むことができるだろうか、千通は数の限界だろうか、毎日お手紙を差し上げ(お気持ちを)お伝えになった。

#### [頼信、命婦を娶る]

一条帝は少しこのことをお聞きになって、勇猛な侍魂にこれほどまで心惹かれたのであろうかも、その命婦をお呼び出しになって、「どのような返事をさしあげたのか」とお聞きになられたところ、とても気後れするようにかしこまった様子で、あれこれと申し上げず、俯いて座っている。すぐにその文をお取り寄せになって、(一条帝が)ご覧になられたが、とうとう返事までもしなかったと見て取れて、とてもひたすらに恨んでいるようであったので、気の毒にお思いになって、「このように長年の思いを、どうして情もなくいい加減にすることができるのだろうか」と言って、すぐに(彼女を)下賜するのがよいとした。頼信朝臣はこのようにお聞きになって、もったいないものと思いつつも、また恐ろしくお感じになった。すぐにその知らせがあったので、頼光朝臣は非常にお喜びになって、まず(命婦を)自

分のところに迎えて、手回り品などを細やかに用意して、長保二年二月、吉日を選んで婚礼の儀を厳かに執り行うのである。

### [千手丸の誕生]

こうして年月をお過ごしになるほどに、夫婦の仲は浅くはないものとなって、普

鴛鴦の契り浅からずして、

通でもないような様子でいらっしゃったところ、いっそう喜びも重なって、神仏の

たゞにも有らぬ様に坐しければ、

いとゞ嬉しさも打ち添えて、

加護も健康も油断なく、早くもその数ヶ月頃になって、長保五年四月九日、安産で

祈誓医療弛みなく、

早其月比に成りて、

男の子がご誕生になった。両親のお喜びはかえって申し上げてしまえば浅いものになるだろう。その時、頼光朝臣は、美濃守になって、一昨年からその地にいらっしゃったので、すぐにご使者が参上した。美濃守殿、このことをお聞きになり、自分の孫ができた気持ちで、お喜びになること格別で、早くも任期をまっとうして上洛し、会いたいとばか、思い急いだのだった。すぐにお名前を「千手丸」とおつけになり、とても慈しみ大切にお育てになった。



---

## 注釈

※壺・春宮大進……皇太子に関わる事務を司る役所である春宮坊の三等官。

※式・東宮学士……皇太子に儒学を講義する学者。

※参・玉簾……玉で飾られた簾。

※肆・東山……京都市東山区のあたりか。

※伍・簀……ひさしの外側にある板敷の縁側。

※陸・灯台……木製で上に油皿を置いて灯心を立てて使う証明具。

※漆・柵……杭を並べて柴や竹などを横に並べて水流をせきとめるもの。ここでは「涙を堰き止められるものがない」という比喻として用いられる。

---

恋煩いで仕事ができなくなって手紙を送り続ける 26 歳怖くないですか？

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2021/7/18

海熊童子